

聖書：マタイ 6：16～18

説教題：断食するときは

日時：2018年9月2日（朝拝）

最初に皆様から2週間の夏季休暇をいただいたことを感謝いたします。今年も夏休み前には「ウニ丼を食べるんですか～。美味しいものを食べて来て下さいね！」と言って送り出していただきました。今年、実家の石巻にいたのは3日間だけでしたので、それほどたくさん食べたわけではありませんが、それでも振り返れば毎日ウニを食べましたし、色々な海の幸も楽しみました。2日目は震災後初めて女川を訪問し、ウニ丼の代わりに「女川特選丼」という魚介類てんこ盛りのどんぶりを父のご馳走で楽しみました。さて食べ物のお話ばかりすると、この後の説教がしづらくなるため、この辺でやめます。今朝、私が語らなければならないテーマは「断食」です。皆さんにとって、この断食はどれほどなじみがあるでしょうか。このマタイ6章の文脈をもう一度思い起こして頂きたいと思いますが、ここでは「善行」の問題が取り上げられています。その基本メッセージとして1節に「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい」とありました。そしてユダヤにおける三つの代表的な善行として2～4節では「施し」について、5～8節では「祈り」について、そして「主の祈り」の教えをはさんで16～18節で「断食」が取り上げられています。これらはそれぞれ対隣人との関係における善行、対神との関係における善行、そして対自分との関係における善行と言えます。この三つの中で一つ目の施しと二つ目の祈りについてはクリスチャンはほとんど実践したことがある、いやある意味で日々実践している事柄でしょう。しかし断食についてはどうでしょう。おそらくほとんど気に留められていない。そのため、このような箇所をどう読んだら良いのか戸惑ってしまう。私たちは色々な理由で食を抜かします。朝、遅く起きて朝食抜きとし、昼と一緒のランチをとる人もあるでしょうし、胃の検査のために食事を1回取らないとか、ダイエットのために断食することもあります。しかしここで言われている断食はそういうものではなく、もっと宗教的な目的のもとにするものです。やや近いものとして私が思い起こすのは神学校時代に時々なされた節食ランチです。その日の昼食は質素にして飢餓で苦しむ人たちを覚えて祈り、浮いた分を国際飢餓対策機構にささげようという趣旨のものでした。私は「さすが神学校。このようなことも訓練されるのか。」と思った一方、一体どんなさみしい食事になってしまうことかと恐れおののいていましたが、出て来たのはわかめ入りのご飯とお味噌汁、そして漬物でした。おかずは確かに少なくとも、わかめご飯はそれなりに量があって、予想していたよりは

るかに十分でした。「これなら助かった一。この程度なら、年何回かあっても問題ない。」と安堵したことを思い出します。しかしこんな調子では今日の箇所での断食と随分かけ離れていると言わなければなりません。果たして私たちはこの断食をどう考えたら良いのでしょうか。

ある人は今日のクリスチャンは断食をする必要はないと考えます。旧約では確かに断食の日が定められていました。レビ記 16 章の「贖いの日」の規定の中に記されています。しかし今は新約時代である。ヨハネの弟子やパリサイ人は断食するのに、イエス様の弟子たちが断食しないのはどういうわけかとイエス様が尋ねられたことがあったのではないかとある人は言います。しかしイエス様は決して断食を否定されませんでした。その箇所でイエス様は「花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、悲しむことができるでしょうか。しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。そのときには断食します。」と言われました。そしてイエス様の復活後、使徒の働きにおける弟子たちはしばしば断食しました。また今日の箇所でも「断食するときは」と語られています。ある人は、「『断食するときは』と言っているだけであって、断食しなさい！とは命じられていない。それをするかどうかは私たちに任されている。」と言います。確かにそうですね。しかしイエス様は「ひょっとしてあなたがたが断食することがあるなら」という意味で語ったのでないことは明らかです。そうであるなら、一つ目の「施し」も二つ目の「祈り」も同じになります。それはしてもしなくても良いが、もしする場合には、これこれに気をつけなさいという勧めになってしまう。ですから断食は命じられてはいませんが、施しや祈りと同様、当然（少なくとも当時の）信者たちが行なうだろうとの前提のもとに話されていると考えられます。ちなみに私たちの教会の信仰基準であるウェストミンスター信仰告白第 21 章 5 項にも、特別な機会に行なわれる私たちの神礼拝の要素として「神聖な断食」がリストされていますし、日本長老教会の礼拝指針にも「断食と感謝の日」（12 章）という項目があります。

では私たちはこの断食を私たちの信仰生活に不可欠なものとして復興することに努めるべきでしょうか。お隣の韓国ではその話を良く聞きます。その証しを聞くと、私たちに必要なのはやはり彼らのような祈り、そして断食ではないか。私たちもまた断食復興に努めることによって神の偉大な働き、リバイバルを期待できるのではないかと言う人もいます。しかし何かをすれば何かを得られるという自動販売機的信仰は聖書的とは言えません。一般にプロテスタントの教会で断食をあまりしないのは、カトリック教会

への反動である！形式に捕らわれることへの警戒心のあまり、価値あることから遠ざかってしまったと言われ、そこには反省すべきところがあると思われませんが、同時にプロテスタントが見抜いた大切な真理もあります。それはただ断食すれば良いというものではないということ。その習慣が私たちの生活にあれば良いのではない。また聖書は外側の断食が霊的祝福のカギだとまでは強く主張していません。ですから私たちは正しいバランスを保って考えて行かなければなりません。

では断食とは一体何のためにするのでしょうか。聖書で断食が行なわれた箇所を見ると色々なケースがあります。罪を悲しみ、悔い改めの祈りをささげる時になされています。また将来のあわれみや神の特別な導きを請い求めて断食するケースもあります。また使徒の働きにはパウロたちが教会ごとに長老たちを選び、断食して祈ったと書かれています。これらいずれにも共通しているのは、神の前にへりくだって心を注ぎ出して祈る時に断食も行なわれたということです。なぜ祈るだけで良しとせず、断食まで一緒にするのでしょうか。それは私たちの「心」と「体」は一体であることと関係します。確かに私たちは心から神に祈れば良いのです。しかしある時には心だけでなく体も一緒に神との交わりに集中する。通常ならして良いはずのことも一時的に自発的に遮断して、肉体もただひたすら、専ら神にのみ向かう。そうして心だけでなく体もそこに加わって来る時、私たちは心と体で一体の神秘をもって、より良く神に向かうように助けられる。ただ心で祈るだけでは味わえない、全存在を持つての神への接近が導かれる。ここから私たちは大切なことを知ります。それは断食は私たちのためにあるということです。一般に断食は神のため、神へのアピールのためにすると考えられてはいないでしょうか。思い起こされるのはバアル預言者たちが神の名を呼んでも答えがなかったため、必死に踊ったり、自分たちの体を剣で傷つけたことです。神よ、私はこれほどに苦しみ、犠牲を払って本気で求めているのですから、どうかこの祈りを聞いてください。そういう神へのアピール、神の注意を引きつけるパフォーマンスとして。しかし神はそのようにされない気がつかない方ではありませんし、そんなことを私たちにしてほしいと思っ

ている方ではありません。断食は神にとって必要なのではなく、私たちににとって時に必要なのです。私たちの神への祈りを助けるためのものです。食を断つことは肉体的に厳しいことですが、それを一時的に断つてでも神に向かわんとする時、私たちの心は一層強く神に集中することへと導かれ得る。もちろん空腹との戦いがあるでしょうけれども、それを乗り越える神への強い求めを持って自分の体がこのことに取り組む時、私たちの心は強められて、まさに全存在をもって神の前にへりくだり、心を注いで祈り、頼るよ

うにと導かれ得るのです。

このように断食はその人が神を強く求めている証しであり、特別な敬虔さの一つの印と言えます。しかしそうであるがゆえに、そこには誘惑が忍び寄って来きます。16節に偽善者たちは断食をしていることが人に見えるように、わざと顔をやつれさせるとあります。悲痛な顔をし、陰気な顔つきをして、「私は今、断食しているんですよ～。皆さん、いつもと私の様子が違うようには見えませんか。気がつきませんか。私はこのように食を断ち、つらい思いをしてまで、神を慕い求めている敬虔な信仰者であることをよくよく見て下さいね～」先に見た施しや祈りもそうでした。2節に偽善者は施しをする時、わざわざ会堂や人通りの多い所に出て行って、これ見よがしにそれを行なうとあります。5節にも、偽善者たちはユダヤ人の祈りの時間である午前9時、正午、午後3時に、人通りの多い交差点にたどり着くようにと考えて家を出発し、その時間が来たからと言って四つ角で止まってお祈りし、「皆さん。このような敬虔な信仰者である私を認めてください。敬ってください。他の人にも伝えてください。」とアピールする。とてもこっけいな姿です。しかし私たちは他人事として笑い飛ばすことはできず、むしろここに自分の姿を見るのではないのでしょうか。最初は良い気持ちでそれをしようとしても、つい自分がした良い行ないを人に吹聴したくなる。自分の前でラッパを吹き、「皆さん、こっちを向いて下さい！気づいて下さい！」という行動を取る。そしてほめてもらいたい。

しかしイエス様は、そのような人はすでに自分の報いを受けていると言います。これは前にも述べたように領収書を出すという意味の言葉です。その人は求めたものを得たのです。なのにどうしてさらに神からも報いがあるかのように考えることができるのか。神の目の前で、それは何の賞賛にも値しないとイエス様は言われます。

どうしたら良いのでしょうか。イエス様が言っていること、それは人にではなく、神に見られるようにしなさいということです。このイエス様の言葉を聞いて思うことは、私たちの問題は神を真の意味では見ていないということです。人間ばかり見ている。どうしてそうなるのか。それは信仰によらなくても分かる今すぐの手応えを感じていたいからではないのでしょうか。神がすべてを見ていると聖書から教えられていても今一步実感が湧かない。良い行ないをした時、「本当にあなたは良い行ないをした！」と天からの声が聞こえるわけではない。すると私たちは耐えられなくなってくる。そこでその評

価の声を人間に求めるのです。そしてそうになると、いかに人間の目に良く見えるようにするかに腐心するようになる。効率良く見てもらうため偽善的になる。そして自分が願う通りの評価が得られないと不満の心を持つ。さらに自分よりもっと評価されている人を見ると激しいねたみや敵対心を持つようになる。

そんな私たちにイエス様は神の目こそを意識しなさい！と言っています。ここにある素晴らしいメッセージは神はあなたのすべてを見ておられるということです。天の父は、その子どもである私たちの一挙手一投足を深い関心をもって見つめておられる。ちょっと他のことに思いを向けていて良く見ていなかったというようなことはない。そして神は外側だけでなく、それ以上に私たちの心、その動機まで見ています。その方の前ではごまかしはききません。ですから私たちは本当の意味で正しくなければならぬのです。ミカ書6章8節：「人よ、何が良いことなのか、主があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」このような神との真の交わりに生きるなら、私たちは人にアピールする生き方をして、人からの賞賛を得ようとする生き方はしなくなるでしょう。なぜならそんなものとは比較にならない、はるかに私たちに深く満たす神との交わりを経験するからです。むしろ人の評価に心を捕らわれて、この大切な神との交わりから心がそれることがないように、17節にある通り、頭に油を塗り、顔を洗って外に出るようにする。そうして神との間でだけ、この大切な時を持つようにするのです。

そうする人に18節で「報い」が約束されています。これはもちろん、この断食が功績とカウントされて神から祝福を勝ち取るということではありません。断食は神にとってありがたいことではなく、先に述べたように、私たちが心から神に向かうためのものです。しかしそのようにして神を求める者に神は豊かな報いを約束しています。それはどのようなものか、ここでは具体的には書かれていません。それはその祈りの交わりを通して、その場でその人を豊かに満たすということかもしれません。あるいはその切なる求めにやがて具体的な導きや解決を与えてくださることによってかもしれません。あるいは最後の日に、そのように熱心に神との交わりを求めて歩んだことに対して神からの賞賛が与えられるということによってかもしれません。いずれにしろ、隠れたところで見ている天の父は、この取り組みに豊かに答えてくださると言われています。だからこの方にこそ焦点を定め、この方に対してそのことをしなさいと言われているのです。

私たちはどうでしょう。神を見上げないで、人ばかりを見て、人の評価に振り回される生活を送っていることはないでしょうか。大切なことは神に対してするということです。そしてその基礎は神は私たちを隠れたところで常に見ていてくださるということです。天の父は、その愛する子どもたち一人一人の歩みを深い関心と愛のまなざしをもって今日も見つめておられる。そのことを信仰によって見上げる時、私たちは感謝をもって、何よりもこの方に対して正しく歩むようと励まされます。そしてそのように神との交わりを大切に、神に対して生きる時、私たちは私たちを最も深く満たす満足と喜びに生きる者とされるのです。そして私たちは今日の箇所から神を求め、へりくだって神と共に歩む礼拝生活の一つとしての「断食」についても心に留めさせられたいと思います。これは義務の心からするものではありませんし、規則としてすることでもありません。しかし私たちの心と体は一体です。もし私たちが人生の様々な時を過ごす中で、より一層神に心を向け、神との交わりに集中したいと願う時、体もまた他の一切の事柄を断って神にだけ向かうことは大きな助けを私たちにもたらすものです。そしてどのような仕方であっても真心から神を求め、神に近づく時、神はその信仰を通して私たちを祝福して下さいます。私たちはその幸いを知っていく者でありたいと思うのです。